

自然体験とアートにおける学びに関する一考察 —「土」を用いた絵の具づくりの実践事例を通して—

A Study on Learning in Art and Experience of Nature for
the Students of Teacher-training Course of Child Care and Education :
Through the Practice of Paint Made from "Soil"

宮野 周

Amane MIYANO

要 旨

本稿はアートを通じた自然との直接的な体験を通してこそ、学生の自然に関するさまざまな気づきや主体的な学びが得られると考え、「土」を用いた絵の具づくりの実践を通して自然素材とのかかわりとアートにおける学びの可能性について明らかにすることを目的としている。まず実践のための視点として①自然との対話とまなびほぐし、②造形素材としての「土」の見直しの必要性という2点について述べた。次に実践として①身近な自然に目を向ける感性を育てること、②既成の知識を教員から「教わる」という学び方を解体し、ものや他者との関係性による遊びの感覚とともに組みなおす「まなびほぐし」を視座に「土で描こう！—構内にある土を用いた絵の具づくり—」を行った。幼児教育学科選択科目「アート教育論」（履修者は3年次学生20名）において身近な自然素材としての「土」に焦点を当て、学生自身が土集めからその土を使った絵の具づくり、描画活動を行った実践の概要について述べた。実践の考察はそれらの活動の過程における学生の様々な気づきや学びを実際の活動の様子や感想や気づきを記載するスケッチブック、授業内における発話をもとに行った。その結果として①土みつけのプロセスにおける気づきと身体技法としての学び、②土との対話から色ならべの活動、③リフレクションツールとしてのスケッチブックと「まなびほぐし」という3点とその可能性について明らかにすることができた。

I. はじめに

現在、幼稚園や保育所では園内外における自然環境や自然体験活動の見直しや子どもたちの

体験を豊かなものにしていくことが求められている。また学校教育においては成績向上や試験の点数獲得など目に見える学力を重視した教育の流れに次々と流され、社会が多様化する中で子どもが身体感覚を鍛えたり、感性を研ぎ澄ましたりする場面が学校の中や日々の生活の中でも減ってきているのではないかという指摘もなされている¹⁾。さらに保育者を養成する段階から自然と直接触れる体験や自然に目を向ける感性を持つことなど、保育者自身の自然体験不足も指摘されている²⁾。また学びの文脈におけるモノや環境に着目した社会的構成主義による学習論や既成の知識を「教わる」という学び方を解体し、遊びの感覚とともに組みなおす「まなびほぐし」の必要性も指摘されている³⁾。

本稿ではこうした問題意識からアートを通した自然との直接的な体験を通してこそ、学生の自然に関する様々な気づきや主体的な学びが得られると考え、①身近な自然に目を向ける感性を育てること、②既成の知識を教員から「教わる」という学び方を解体し、ものや他者との関係性による遊びの感覚とともに組みなおす「まなびほぐし」を視座に自然素材とのかかわりとアートにおける学びの可能性について明らかにすることを目的としている。具体的には、幼児教育学科選択科目「アート教育論・アート教育論演習」の実践事例において学生が身近な自然素材としての「土」の採取から土の絵の具づくりを行っていくプロセスから考察していくことにする。

II. 授業実践のための視点

1. 自然との対話とまなびほぐし

幼児期の子どもと自然環境との出会いを大切にしている保育実践が現在、幼稚園や保育所で取り入れられている。自然は子どもたちに様々な素材や遊びながら工夫して表わす場を提供してくれる。保育に自然を取り入れるということは、例えば「芋掘りの体験」でいえば芋を子どもたちが抜きやすいようにあらかじめ環境として準備されている例など、予定調和的な体験を子どもたちに与えるのではなく、自然界の多様性が子どもたちの五感を刺激し、(ときには危険なことも含む)自然と向き合いながら、対話することで、子どもの体験や表現力を豊かなものにしていくことが求められている。

こうした自然との対話など多様な環境と子どもの経験としての学びに着目し、それぞれの文脈における媒介的な相互作用に基づく認知発達を強調した「状況的認知」理論や「状況的行為」理論が近年、教育現場や保育現場において取り上げられている。とくに他者やモノとの関係性から構成される「構成主義的な学び」はイタリアのレッジョ・エミリアの保育においても実践されている。この構成主義的な学びにおける「知識は外側から与えられるのではなく、学習者が人やモノ、環境等と関わることによって構成する」という立場は自然との対話を支える学習論ともなりうる。また対話に着目した学びのあり方については、佐藤学の「対話的学びの三位一体論」があげられる。佐藤によれば「学び」が成立する要件とは「出会いと対話」であるという⁴⁾。「学び」とは、モノ(対象世界)と他者と自分との対話的な実践において構成されるものととらえられる。ここで取り上げる「学び」とは佐藤が述べる「もの」や「こと」や「人」との関わりを、学び手の身体を投企して紡ぎあげる営みである。また佐伯眸はこれからの新たな学びのスタイルとして「まなびほぐし」(アンラーンunlearn)の必要性について指摘する⁵⁾。

「まなびほぐし」とは「まなび (learn)」のやり直しであり「これまでの『まなび』を通して身に付けてしまっている『型』としての『まなびの身体技法 (まなび方)』について、それをあらためて問い直し、『解体』して、組み替えるということを意味している」と述べている⁶⁾。

この構成主義的な学びや佐藤の「身体技法としての学び」、佐伯の「まなびほぐし」という視点は保育者養成における素材との出会いや他者との関係性など教材研究の視点として示唆に富んでいる。さらに与えられた人工物で保育を考えるだけではなく、自分たちの足元にある素材に意識的に目を向けていくための新たな視座を与えてくれるものである。

2. 土という造形素材

水、砂、土、泥を扱った保育は「どろんこ遊び」に代表されるようにその教育的意義からこれまで多くの幼稚園・保育所で日常的に実践されてきている。土は身近にあり日常的に使用されているため、その特性が改めて意識化されにくい造形素材である。自然界において広く目にすることができる土は、鉱物や動植物の残骸が腐食したものやバクテリアなど有機物が混ざり合っていてきている。造形素材という観点からすると土は陶芸に扱われる陶土 (土粘土) が連想され、水の量を調節することによって具体的な形を生成するものとして捉えられる。しかし、レッジョ・エミリアの保育による先行事例のように、土は乾燥させて粉状にするともた別の造形素材として扱うことができる⁷⁾。レッジョ・エミリアの保育ではものの本質と色や匂いを捉えるために、公園などで集められた土や石、葉などの自然物をふるいや大きな石によってパウダー状にし、それらをパレットに分けて造形素材 (絵の具) として子どもたちが扱っている。この様々な自然物を子どもたちが自分たちの感覚で見つけ、それらを粉状にすることで、そのものの特性から色や形が明確となり、一つ一つが造形素材として変容することになる。この事例のように身近にある「土」を集め、粉状にし、絵の具として扱うという一連の行為は土が本来もつ特性 (色や匂い、質感など) を探求する試みであり、アートとしての既成のものへの価値・意味を問い直す (新たにモノに意味をもたせる、あるいは新たな意味を付与する) 営みでもある。

Ⅲ. 実践「土で描こう！ 一構内にある土を用いた絵の具づくり」

1. 実践の目的

保育者養成において①身近な自然に目を向ける感性を育てること、②既成の知識を教員から「教わる」という学び方を解体し、ものや他者との関係性による遊びの感覚とともに組みなおす「まなびほぐし」の有効性を検討するために「土で描こう！ 一構内にある土を用いた絵の具づくり」の実践を行った。

2. 実践の方法

実践は、幼児教育学科における選択科目「アート教育論」を履修する学生 (3年次) 20名を対象に2013年5月14日、21日、28日の3週に分けて行った (90分3回)。土の採取、絵の具づくりの材料は以下の通りである。

砂、土、採取するための袋、ふるい、乳鉢、ボール、プラスチック製のコップ、筆、溶き皿、

スコップ：空きペットボトルとビニールテープにより自作、洗濯のり、古新聞紙、画用紙、水

(1) 5月14日：土みつけ、土集め、土の乾燥

- ①土を採取するための道具の工夫として廃材であるペットボトルをはさみやカッターで切り開き、各自が手作りスコップづくり（材料：ペットボトル500ml, カラービニールテープ各色）を行った（写真1）。
- ②授業時間内に3～4人のグループに分かれて構内の様々な場所で土みつけをし、土を採取する（写真2）。グループメンバー同士で相談しながら進め、土を採取する場所は身近な環境という視点から十文字学園女子大学のキャンパス内に限定した。採取してきた土は小枝や植物の根、小石、水分など含んでいるため、まず乾燥させるために次回の授業まで採取した場所を記し、広げておいた（写真3）。



写真1. 手づくりのスコップ



写真2. グループで土集め



写真3. 土を乾燥させる

(2) 5月21日：土を粉状にする、色くらべ

- ①乾燥した土から草や小枝を取り除くためにふるいにかけて、乳鉢をもちいてさらに土を細かく粉末状にする（写真4）。
- ②細かくなった土を透明のコップに入れ並べる（写真5,6）。



写真4. ふるいで小枝や根などを取り除く



写真5. 採取した場所と細かくした土

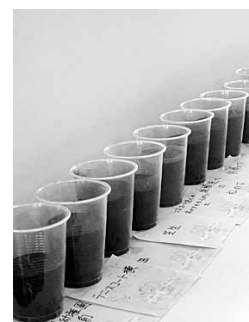


写真6. 色の違いでならべる活動

(3) 5月28日：絵の具づくり、描画体験

- ①水や洗濯のりをと一緒に混ぜ、土の絵の具をつくる。
- ②できた土の絵の具を水の量や洗濯糊の量を調節しながら描画体験する（写真7,8,9）。

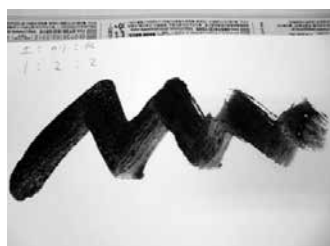


写真7. 水と糊、土の割合を考える

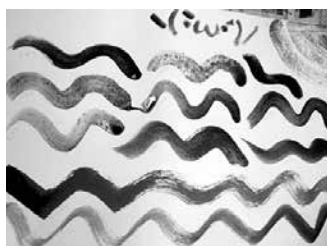


写真8. 描き比べてみる



写真9. 色の違いを意識した表現

3. 実践の結果と考察

(1) 土みつけのプロセスにおける気づきと身体技法としての学び

構内という限られた場所であってもグループ活動としてそれぞれ採取することで多種多様な土を集めることができた。また学生A「スコップを作るのに少し固めのペットボトルの方がすくしやすいと思いました。場所によって砂の色や感触が違って新しい発見をすることができました。日が当たっている所と当たっていないところの土の色の違いを感じることができました。拾ってきた土を広げてみると色がそれぞれ違ってとてもきれいでした。」や学生D「場所によってまったく土の質感、色は異なる。粒の大きさ、サラサラ度もぜんぜん違ってびっくり。数メートルしか離れていないのにこんなに違うんだなあ。」や学生E「土は場所によってまったく色が違ってとても不思議に感じた。それぞれの土、成分が違うのかな。土の表面と掘り返したときの色が違っていたりした。」という意見からもみられるように、自作の道具で土を自身の身体を通して感じ、採取した土を机上に一同に並べ乾燥させることで採取した際の色の違いや乾燥後の変化した色の違いなどを発見することができた。

このように「土みつけ」という遊び的要素を含んだグループ活動は身近な環境にある砂・土を「材料集め」という視点で見つめ直すことや土を採取するための道具づくりから行うことによって学生の直接的な自然体験を促す学びとなったのではないだろうか。

(2) 土との対話から色ならべの活動

見つけて採取してきた砂・土をふるいや乳鉢などで小枝や植物の根、落ち葉などを取り除き細かくする活動では学生A「土を細かくする体験は初めてだったので貴重な体験をすることができ、夢中になって細かくしていました。細かくする前の感触と細かくしたあとの感触の違いも感じる事ができました。」や「描いたときの土の匂いを感じた」という他の学生の意見からも土の変化や匂いの変化が土を粉末状にするという行為によって学生に意識化されたと考えられる。

また細かくした土を透明なコップに入れることで、土の色を並べ比較したり、並べ替えたりすることができるようになった(写真10)。これは普段は意識することがない土の色を粉末状にすることで、土が色の粉へと変換され、色



写真10. 色の違いでならべる活動

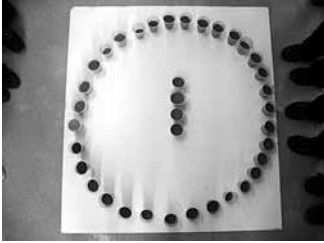


写真11. 色の違いによる環

を意識しやすくなったといえる。それらを並べることで土の多様な色の違いに気づくための活動となり、自らの感覚を通して並べ替えるこうした活動は色彩学習への意識を高めることにつながるだろう（写真11）。

(3) リフレクションツールとしてのスケッチブックと「まなびほぐし」

自分の身体を通して土に触れ色の違いに気づいたり、水で溶いたり、好きな固さを混ぜながら見つけたり、色の変化の様子を楽しんだりという土との出会いによる経験はこれまで学生が行ってきた予定調和的な学びとは異なる、自らの身体を通じた気づきと遊びの要素を取り入れた「まなびほぐし」としての学びである。その時々学びは活動内容や感じたこと、気づいたことという形で画像と文章でスケッチブックに記録する（写真12, 13）。その記録をもとに改めて活動を振り返ることで自身のそのときには気づかなかった点に意味づけを行い、さらに深い自身の「学び」へと展開していく。

このことはこの活動全体を通した学生Cの「自分の取ってきた砂でこんな風に絵を描いたり、字を書いたりするのは初めてのことだったので不思議な感覚で楽しかった。水の量や土の量で色はまったく違うものになり、描いている感覚も異なるということを知ることができた。」の感想や学生B「土を集め終わり、それを並べてみると本当に様々な色や形、大きさがあり、普段生活しているとそういったことには気づいていなかった。様々なことを意識して見るということが必要になってくると思った。そうすることで今まで見えなかったことが沢山みえてくると思ひ、様々なことに気付くと思ったからである。もっと色んなところの土を集めてみたいと思った。楽しかった。」という意見からも今回の学びがこれまでの学びのスタイルとは異なっていることをうかがわせる内容となっている。

また乾いた絵の具が土の成分でキラキラ輝く箇所があることに気づく学生や絵の具の色をアイスクリームの色に見立てて表現したものや自分が作った絵の具のみならず、他の人の絵の具を集めたいという気持ちになり、お互いの絵の具を交換し合い、描き比べを行ったり、ドーナツに見立てて「土の絵の具集め」という遊びに発展したりする様子もみられた（写真14）。



写真12. スケッチブックの振り返り 1



写真13. スケッチブックの振り返り 2

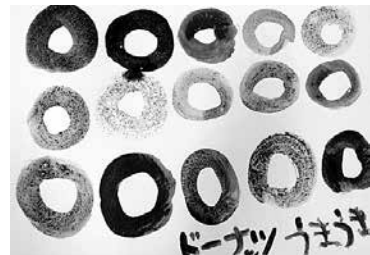


写真14. 色集めと表現の見立て

IV. まとめと今後の課題

本稿では保育者養成における①身近な自然に目を向ける感性を育てること、②既成の知識を教員から「教わる」という学び方を解体し、ものや他者との関係性による遊びの感覚とともに組みなおす「まなびほぐし」を視座に自然素材とのかかわりとアートにおける学びの可能性について考察してきた。

いつも見慣れている自然をいつもと違った目線で見ると今まで気づかなかった姿を発見できるということがある。今回の活動では個の活動としてではなく、グループで活動することを通して自分ひとりでは見つからない気づきが他者とのかかわりを通して見ることができた。また土の採取のための道具づくりを自ら行うことで「土を集める」という行為をしたいという、動機付けにもつながったことが伺えた。またスケッチブックによる振り返りは学びの深い気づきや可視化に役立ち、リフレクションツールとしての有効性も明らかとなった。土集めや粉末状にするプロセスを通して、自然界にある色と形には同じものは一つもないということや触った感じ（テクスチャー）もざらざらやつるつる、温かい感じから冷たい感じと様々であることを感じ取ることができた。このような自然の多様性との出会いは多様な感じ方を我々に与え、その豊かさが今後の表現を豊かにしていくのではないだろうか。またこれまで学生が行ってきた学習とは異なる遊びの要素を取り入れた「まなびほぐし」としての学びは、自分の身体を通して土に触れ色の違いに気づいたり、水で溶いたり、好きな固さを混ぜながら見つけたり、色の変化の様子を楽しんだり土との出会いによる多様な経験を通して得られるものであることが明らかとなった。

今後の課題としては、限られた場所だけでなく、様々な別の場所における土集めを行い、色比べを行うなど色彩教育として土を教材化する可能性を探ることや土に限らず植物など他の様々な自然素材との対話を促す教材開発の視点と実践の検討をすることである。

V. 引用文献

- (1) 日本ネイチャーゲーム協会監修, 神長美津子・酒井幸子・田代幸代・山口哲也編著『すごい!ふしぎ! おもしろい!子どもと楽しむ自然体験活動—保育力をみがくネイチャーゲーム—』光生館, 2013.
- (2) 同上.
- (3) 荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎『ワークショップと学び I まなびを学ぶ』東京大学出版会, 2012.
- (4) 佐藤学『学びの身体技法』太郎次郎社, 1997, p.25.
- (5) 前掲書 (3), p.62.
- (6) 同上.
- (7) 佐藤学監修・ワタリウム美術館編『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』2011, pp.122-131.